



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

40

モーム

月と六ペンス

お菓子と麦酒

雨

赤毛

中央公論社

世界の文学 40

©1965

モーム

訳者 中野好夫
上田 勤

昭和40年 1月12日初版発行

昭和44年 3月20日6版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

月と六ペンス

3

お菓子と麦酒^{ビール}

237

雨

435

赤毛

485

解説

512

年譜

528

月と六ペンス

はじめてチャールズ・ストリックランドを知ったとき、
 ぼくは、正直に言つて、彼が常人と異なつた人間だなと
 いう印象は、少しも受けなかつた。だが、今日では彼の
 偉大さを否定する人間は、おそらくあるまい。ぼくは、
 ときを得た政治家や成功した軍人の偉大さを言っている
 のではない。それらはひつきようするに、彼らの人間そ
 のものよりも、彼らが占める地位に伴う偉さであるにす
 ぎない。ひとたび事情がちがえば、たちまち平々凡々た
 るものになってしまう。たとえばあまりにもしばしば見
 られる実例だが、桂冠した首相は、もはやもつたいぶつ
 た一介の雄弁家にすぎなかつたり、軍隊から離れた將軍
 は、単に商都の一好々爺にすぎなかつたりする。そこへ
 行くと、チャールズ・ストリックランドの偉大さは本物
 だつた。諸君は、あるいは彼の芸術を好まないかもしれ
 ないが、全然無関心であることは、ほとんど不可能であ
 る。諸君の魂を、彼はゆさぶり、そしてつかんでしま
 うのだ。彼が嘲笑の的であつた時代は、もはや過ぎ去つ

た。そしていまでは彼を弁護したり、賞讃したりするこ
 とは、奇矯でもなければ、つむじ曲がりでもない。彼の
 幾多の欠点は、むしろ彼の長所をひきたてる必要条件と
 して許されている。芸術家としての彼の位置に異論をさ
 しはさむことは、むろんいまでも可能であるし、それに
 讃美者の阿諛というものが、これまた誹謗者の攻撃に負
 けない氣まぐれさかげんなのだ。だが、ただ一つ、疑う
 ことのできないことは、彼が天才であつたという事実だ。
 私見をいえば、芸術において最も興味深いものは、結局
 するところ芸術家その人の個性だと思ふ。そして人間さ
 え特異、独自のものであれば、その他の欠点は、すべて
 喜んで許すつもりだ。おそらくベラスケスは、エル・グ
 レコよりもすぐれた画家であつたらう。しかし彼に対す
 る賞讃は、すでに陳腐な月並みに墮して去つてゐる。それ
 に引き替え、この官能的で、そして悲劇的なクレタ島人
 (エル・グレコのこと)は、あたかも立てる犠牲のように、彼の魂の
 神秘を、そのままに示している。画家といわず、詩人と
 いわず、音楽家といわず、すべて芸術家というものは、
 その崇高な、あるいは美しい裝飾によつて、審美感を満
 足させてくれる。が、それはまたあの性的本能とも相通
 じるものがあつて、一種の原始性ともいふべきものを帯
 びてゐる。いわば同時に、彼自身という、より大きな贈
 り物を、われわれの目の前に広げてみせてくれるのだ。

芸術家の秘密を追求することは、なにか探偵小説に似た魅力をさえ感じさせる。宇宙の秘密と同じように、いわば解決の与えられない、それは一つのなぞなのだ。ストリックランドの描いた、ほんのつまらない一枚の習作でさえが、彼の特異な、苦悩に満ちた、複雑きわまる個性を髣髴させるのであり、そしてまたそれだからこそ、たとえ彼の絵を好まない人々であっても、彼の人間に対しては無関心でいられなくなり、彼の生活、性格に関して、ひどく好奇心にあふれた興味をそられてきたのである。ストリックランドの死後四年めだったが、モリス・ユレが、『メリキユール・ド・フランス』に一文を寄せた。そしてはからずもこの一文が、この無名画家を忘却から救ったばかりか、さらにその後いく人かの人たちによって、あるいは追従的、あるいは批判的と、内容の差こそあれ、とにかくそのまま継承されることになった、あの激しいストリックランド熱の口火を切ったのであった。長いあいだフランスにおいて、ユレほど批評家として不動の権威を維持したものはあるまい。したがって彼の主張に対し風馬牛であることは不可能であった。なるほどそれは、多少奇警に聞こえたかもしれない。しかしその後の判断は、彼の評価を裏書きするものばかりであり、今日ではチャールズ・ストリックランドの名声は、まったく彼によって礎石を置かれた方向に向かって、確立さ

れていると言つてよい。ストリックランドの名声の高まりは、美術史上においても最もロマンティックな挿話の一つである。だが、多少とも人間ストリックランドに関係あるもの以外、ぼくは、ここで彼の作品について語るつもりはない。いったいぼくは、しろうなどに絵がわかるものか、黙って小切手帳を出すこと、それだけが彼らの鑑賞能力を示す最上の方法なのだ、という一部画家の増上慢的見解に対しては、とうてい賛成することができないのである。それらは結局芸術の中に、たとえばただ技巧家だけが理解できるというような、そうした技巧の半面しか見ない、奇怪きわまる謬見にすぎない。芸術とは情緒の表現であり、情緒は、すべての人間に通じることばを語っている。もちろんぼくだとて、技巧に関する実際の知識のない批評家に、作品の真の価値をうんぬんする資格などないことは認めるし、おまけにぼくの、絵を知らないことときたら、はなはだしい。だがさいわいに、ぼくはその危険は冒さないですむようだ。というのは、彼の作品そのものについては、すでにすぐれた画家であり、同時にりっぱな文筆家でもあるエドワード・レガット君が、その小著——それは不幸にしてわがイギリスが、フランスのそれに比して、遺憾ながら遜色を認めなければならぬスタイルという点においてもまた、実に美しい好著であるが——その中で、もはや余蘊なく論

じ尽くしているからである。

モリス・ユレは、その有名なストリッkland論の中で、彼の生涯を略述しているが、それは、読者の好奇心をそそるように、いかにも巧みにつづられたものであった。むろん彼の真の目的は、まったく純粹な芸術愛からして、この最大級に独創的な天才に対する世上識者の注意を喚起することにあつた。だが、一面彼の鋭いジャーナリスト的感覺は、そこでなにか「人間的興味」に訴えるほうが、はるかに有効であることを、どうして見のがすはずがなかった。はたしてかつてストリッklandと個人的接觸をもつたことのある連中、たとえばロンドン時代の彼を知っている作家たち、モンマルトルのキヤフエで彼と会つたことのある画家どもは、いままで単に珍しくもない、またしても敗残画家のひとりだくらいに考へていた人間が、なんぞ知らん正真正本の天才であり、しかも現在自分たちと一緒に肩をすりあわせていたのだとわかると、いまさらのように驚きあきれると同時に、フランスやアメリカの雑誌類には、たちまち彼に関する寄稿が——あるものは回想を、あるものは鑑賞論を、といつたぐあいに、陸續として現われはじめ、いやがうえにもストリッklandの評判を高めるとともに、無性に世の好奇心というやつをかきたてた。とにかくうれしい話だった。あのヴァイブレヒト・ロトルツのごときは、

その大著^{*}の中で、実に丹念にも、驚くべき量の典拠文献を列挙している。

人間には、いわば神話好きとでもいうような機能が、生まれつきにあるらしい。たとえば、なにか常人ばなれのした人間でも現われると、たちまちこの機能は、彼らの生涯の中の、あるいは異常な、あるいは神秘的な逸事類をとらえてきて、すばやく伝説をつくりあげ、こんどはそのまた伝説に対して、すっかり狂信的な信仰をさげつくすのだ。それは実生活の平凡さに対する、ロマンスの抗議だともいえる。はてはその伝説の挿話が、一つ一つ、あたかも主人公の名を不朽に伝える、もつとも確實な旅券のようなものになつてしまふ。皮肉な思想家は、微笑を浮かべて言うであらう、あのサ・ウォルタ・ローリは、彼の未知の国々に英語の地名をのこしたことよりも、むしろただ処女女王エリザベスの玉歩の下に、その上着を敷いたという一事によつて、はるかに確實に、人類の記憶の中にその名をとどめている、と。チャールズ・ストリッklandの一生は、完全に無名のそれだつ

* (原注) "A Modern Artist: Notes on the Work of Charles Strickland," by Edward Leggatt, A. R. H. A. Martin Secker, 1917.

** (原注) "Karl Strickland: sein Leben und seine Kunst," by Hugo weibrecht-Rotholz Ph. D., Schwingel und Hanisch, Leipzig, 1914.

た。味方をつくるよりも、敵をつくった。してみると、彼についてなにか書いた連中が、さだめしその貧寒な回想と、奔放な空想によって水増ししたろうことは、少しも不思議でないし、また彼に関する知識が、乏しいだけに、世のロマン的文士諸君にとっては、まさに絶好の機会を提供するに足るものであったことは言うまでもない。まこと彼の生涯には、実に奇怪な事実がおびただしいし、性格にはなにか異常なものがある。さらにその運命にいたっては、少なからず悲惨なものさえあった。そしていつのまにか、それは歴史家でさえ、もし賢明ならばむしろ攻撃の火ぶたをためらうような、整然たる一つの伝説ができあがってしまったのである。

そしてロバート・ストリックランド師こそは、まさしくその賢明な歴史家でなかったのだ。彼は、彼の父親の晩年に關し、「世上流布されて、幾多現存者に多大の迷惑を及ぼしているある種の誤解を除くため」と称して、チャールズ・ストリックランドの伝記を書いた。なるほど彼の生涯に關して、世上一般に信じられている話の中には、いわゆる良家の人々のまゆをひそめさせるようなものが多いことは事実だ。ぼく自身は、かなりの興味をもって、この伝記を読んだが、はたして結果は、まことに無味乾燥、読むに耐えないものであることを知って、おおいに喜んだのである。なるほどストリックランド師

は、父とし、夫として、やさしくて、勤勉で、そしてまことに道徳的な、あつぱれりっぱな父の像を描きあげている。そもそも近ごろの聖職者は、いわゆるあの原典解釈学というやつを修めるだけあつて、なんでも物事を強引に解釈づけることだけは、まことにどうもお手のものらしい。現にこのストリックランド師なども、世の孝行息子として、父の思い出にとつて不都合なような生前数数の事実には、のこらずなんとか「解釈」をつけているその手ぎわの見事さ、これは、将来必ずや彼のために、国教会内樞要の椅子を約束するものであらう。もうすでにぼくは、聖職者用ゲートルもいかめしく、そのたくましいふくらはぎを固めている彼の姿が、目に見えるような気がする。いったいこの書物、なるほどあつぱれりっぱな仕事ではあらうが、同時に一つの冒険でもある。というのには、そもそもストリックランド熱の高まりそのものが、おそらく多分に、この世上流布版による伝説に負うているからである。すなわち彼の絵に魅せられた連中の中には、彼という人間に対する嫌悪、また彼の死に対する憐憫といったものによつて、かえってひかれてきたものが少なくないからである。はたして親しい真情から出た息子の努力は、かえつて父への傾倒者たちの熱に、冷水をかけるような奇妙な結果になった。すなわち彼の傑作の一つ『サマリアの女』が、あたかもこのストリッ

克蘭ド師の伝記出版に伴う批判論議のかしめしかったのちまもなく、画商クリステイの売立てに出たわけだが、そのときの落札値が、同じ作品がわずか九ヵ月前、ある有名な収集家によって買い取られたときよりも——つまりこの収集家が突然死んで、それでふたたび売立てに出たわけだが、——実に二百三十五ポンドも安値だったという事実も、けっして偶然ではなかったのだ。さいわいに人類のもつ驚くべき神話創造機能というやつが、とにかく平凡ぎらいの人間好奇心に対して、かりにも水をさすような話など、一も二もなく抹殺してしまってくれたからよかったが、そうでもなければ、おそらくチャールズ・ストリックランドの独創性、独創力をもってしてさえも、ちよつとこの頽勢を盛り返すことはできなかったであろう。だが、さいわいにまもなくヴァイブレヒト・ロトルツ博士の労作が、あらゆる芸術愛好者たちの心配に対して、最後のな安心を与えてくれたのであった。

ヴァイブレヒト・ロトルツ博士は、あの人間性とは、考えうるかぎりの醜惡なもの、いや、さらにそれ以上何層倍も邪惡なものと考える一派の歴史家のひとりである。そして事実これら歴史家の書くもののほうが、そうでない、たとえば小説の主要人物といえは、得々として、まるで家庭道德の模範生みたいにしか描くことを知らない連中の作品よりも、まずまちがいなくおもしろいのだ。

ばくだけで言っても、アントニーとクレオパトラとのあいだには、ただ経済的利害関係があっただけ、そのほかにはなにもないなどということは、あまり考えたくないし、またティベリウス皇帝が、まるでわがジョージ五世陛下のように、一点非の打ちどころない道德的君主だったなどということは、いもあるよりもよほどたくさん新しい証拠資料でも出ぬかぎり（出なくてさいわいだが）、容易に承服できないであろう。ヴァイブレヒト・

ロトルツ博士は、実にこうした立場に立つて、上述ストリックランド師の無邪気な伝記を、徹底的にやつつけているのであり、結果は、むしろかえってこの不幸な牧師に対して、ある種の気の毒さをさえ禁じえないほどであった。世間体をはばかって口をつぐめば、偽善の極印を押してやつつけられるし、逆に饒舌は、嘘八百というところで簡単に一蹴される。黙れば黙るで、不信、裏切り呼ばわりをされる始末。文筆家としてこそ非難に値すれ、子としてはむしろ当然であるべきこれら微罪のおかげで、しまいには英国民全体までが、そのにせ君子ぶり、からせじ、気どり、欺瞞、狡詐、さらには料理のまずさまで

*(原注) "Strickland: The Man and His Work," by his son, Robert Strickland, Wm. Heinemann, 1913.

*(原注) クリステイ商会売立て目録によると「小川のわきにふせる、ソサイエティ諸島の土人女の裸体。背景はやし・バナナなど描いた熱帯風景、縦六〇インチ横四八インチ」

あげて、槍玉に上げられているのだ。私見としては、ストリックランド師が、その両親間にあったと信じられる、ある種の「おもしろくない関係」、その話までを論駁しようとしたのは、いささか性急にすぎたのではなかったかと思う。彼によると、チャールズ・ストリックランドは、パリから書いたある手紙のなかで、妻のことを「りっぱな女」と書いていたという。しかし他方ヴァイブレヒト・ロトルツ博士が、原物写真にして載せているのを見ると、問題の箇所は、実はこうであるらしいのだ。「女房なんぞまっぴら、くそくらえた。いやはや、りっぱな女だよ。いつそ悪魔にでも食われちまえ」思うに、かつてあの全盛時代のローマ教会といえども、いくら自分に都合の悪い証拠資料だからといって、まさかこんな取扱い方はしなかったろうというのだ。

ヴァイブレヒト・ロトルツ博士は、熱心なストリックランド讃美者であった。それだけに、彼のために下手な体裁をつくるなどというおそれは、全然ない。一見なんの成心なく見える行為の裏に、しばしば唾棄すべき動機のみそみうる事実を、彼の鋭い目はけっして見のがさなかった。彼は美術研究家であるとともに、精神病理学者でもあった。意識下の世界すら、ほとんど彼から秘密を守ることはできなかった。どのような神秘家といえども、彼ほど日常茶飯事の中に、深い意味を読みとったものはいない。

神秘家の見るものは、ことばを越えた神聖なものであるが、反対に精神病理学者の見るものは、ことばを越えた醜態さだ。この博学多識な著者が、その主人公の名声を傷つけるような事柄まで、あますところなく、孜孜として摘発する執拗さには、むしろ一種奇態な魅力さえ感じさせられる。なにか新しい残忍さ、陋劣さの实例を見いだすたびに、主人公に対する彼の興味は、いよいよ増すらしく、またなにかすでに忘れられていた挿話を掘り出して、それでロバート・ストリックランド師の孝心を、一撃粉碎し去るときの彼などは、まるであの異端焚刑を前に会心の笑みをもらす宗教審問官のような、法悦感に酔っているようであった。実際彼の丹念さには、驚くべきものがあつた。どのような瑣末事も、彼の目のがれることは不可能であり、たとえばもしチャールズ・ストリックランドが、洗濯屋の請求書一枚でも、未払いで残していたとすれば、必ずそれは詳細に記載されるであろうし、またたとえ半クラウンの借金にしても、もし彼が返済をしなかったとすれば、その交渉経緯は、おそらく細大もらさず報告されることであろう。

二

すでにこれだけ語られているチャールズ・ストリック

ランドのことを、いまさらまたぼくが書くなど、無用の業に思えるかもしれない。画家の記念碑は、あくまでも作品だ。なるほどぼくは、ほとんどだれよりもよく彼を知っていた。はじめて彼を知ったのは、彼がまだ画家にならぬ前だったし、パリにおけるあのひどい貧乏時代にも、たびたび彼と会っている。だが、もし大戦という運命のさいころが、ぼくをタヒチ島へ送るということがなかったなら、彼に関する回想を筆にすることもまたなかったろう。あまりにも有名な話だが、彼はこのタヒチで晩年を送った。そしてぼくもそこで、生前彼と親しかったという人々に、幾人か会った。つまりぼくは、彼の悲劇的生涯の中でも、一ばん知られていないこのタヒチ時代に關して、ある程度事実を明らかにすることのできる人間というわけ。もしストリックランドの偉大さを信ずることに誤りないとすれば、生前親しく彼を知っていた人間の回想が、どうしてむだであるはずはない。たとえば、もしぼくがストリックランドを知る程度に、あのエル・グレコを親しく知っていた人間がいるとすれば、その回想談を引き出すためには、たとえ千万金といえども、おしいとは思わないだろうではないか。

だが、こんなことを言つて、ぼくは言ひのがれの口実を求めているのではない。だれだったか、名前は忘れたが、われわれ人間は、それぞれ自分の魂のために、毎日

二つの苦行を勤めるがよい、と言つた男がある。賢明な男だ。ぼくも実は、年来小心翼翼としてこの教訓を遵守してきている。つまり一つは、毎朝起きること、そしていま一つは、夜床につくことである。だが、そもそもぼくの性格の中には、一脈の禁欲的傾向とでもいうものがあるらしい。だからこそぼくは、毎週わざわざ、もつとひどい苦行を、われとわが肉体に対して課している。というのは、ぼくは、『タイムズ』の週刊文芸付録というやつを、必ず読むことにしているが、あのつぎつぎと書かれるおびただしい数の新刊書、しかもそれらが出るとき、著者たちのかける楽しい希望と、やがてそれらを待ち受けている運命とをあわせ考えてみることは、まことためになる、よい訓練といわねばならぬ。第一、一冊の本が出て、どれだけそれが、大衆の中にはいつてゆく成算がある？ しかもたまたまかりに当たったとしても、しよせん、それは一シーズンの当なりにすぎない。たとえばふりの読者ひとりに、せいぜい数時間の息抜きか、でなければたいくつな旅行の時間つぶしを提供するために、どんなに作者は骨身を削り、苦い経験をなめ、どんなに頭痛をがまんしたことか、ああ、それは神のみぞ知るだ。いわゆる新刊評なるものから判断すると、これら書物の大多数は、いずれも労作の良書であるらしく、できるまでには、ずいぶん苦心が重ねられている。ある

ものなどは、実に一生にわたる心血が注がれている、というのさえあるらしい。結局ほくの知る教訓は、これだ、文筆家が与えられる報いとは、ただものを書くという喜びと、そして胸にあるしこりを吐き出してしまふ解放感と、ただそれだけだということであり、ほかはいっさい無関心、毀譽褒貶、当たり不当たりなどはいっさい気にするな、ということである。

ところであの大戰というやつが来て、いわゆる新しい態度なるものが生まれた。青年たちは、われわれ旧時代人の知らなかつた神々を見いだした。そしてつぎの世代が、どんな方向に動いてゆくだろうかは、もうすでにわかるような気がする。力に口ざめて、いきりたつ若い世代は、もはやいちいち扉をノックすることなどはしていない。いきなりとびこんで来ると、どっかとわれわれの席にすわってしまったのだ。あたりは、もう彼らの叫喚で鳴り響いている。なるほど先輩たちにも、中には彼ら青年たちの道化踊りをまねながら、しいて自分たちの時代はまだ終わっていないぞと、われとわが心に言い聞かせようとしているものもある。そしてもっとも元氣な連中たちと一緒になつて、叫んでいるのだが、そのおたけびのなんと空虚なことだ。あたかもそれは、脂粉の装いにしいてはなやかさを装いながら、むなしく消えた青春の幻影を、ふたたび形だけでも取り戻そうという、浮か

れ女のはかなさにも似ている。もつと利口なものは、静かにさりげなくおのが道を進んでゆく。冷ややかなその微笑の中には、すべてをゆるす冷嘲さへ浮かんでいる。考えてみれば彼ら自身もまた、かつては同じ喧噪さど、同じ侮蔑とをもつて、やはり自己満足の古い世代を踏み、にじつてきたのである。そしていまのこの勇ましいたいまつ、持ちどももまた、やがてはその席を譲らなければならぬにきまつている。これでおしまいというものはない。かのニネヴェが、空高くその栄光を築き上げたときには、すでに新しい福音は古くなっていた。それを口にするものにとつてこそ、さも耳新しげに聞こえるかもしれない女への甘口も、考えてみると幾百度となく、ほとんどアクセントすらもそのままに、繰り返されてきたのであった。右に、左に、時の振り子は動いてやまぬ。同じ円周を、たえず新しく旅しているにすぎないのだ。

人は、ときに思わぬ長生きをすることがある、そして彼がちゃんと自分の席をもっていた時代から、とんだ他人の時代にまで、生き残ることがあるのだが、そんなときこそ、彼は、人間喜劇のうちでもっとも奇妙な情景の一つを見ることが出来る。たとえば今日、ジョージ・クラブ（イギリス十八世紀の詩人）のことを思い出すものがあるだろうか？ 彼も生前は有名な詩人だった。そして世界は、彼の天才に対して、今日の複雑した生活の中ではもはや考



えられないことだが、それほどに異口同音の承認を与えたものであった。彼は、アレキザンダー・ポープ一派から、その詩法を学び、押韻対連の教訓的物語詩を書きつづけた。だが、まもなくフランス革命になり、ナポレオン戦争が来た。詩人たちは、新しい歌を歌いはじめた。だが、クラブは、相変わらず押韻対連の教訓的物語詩を書きつづけた。おそらく彼といえども、はなやかな人気を騒がれている彼ら青年詩人たちの作品を、読んだことはあるにちがいない。だが、きつとくだらんと思ったのだろう。事実、それらの多くは、くだらん作品だった。

だが、キーツ、ワーズワースの幾編かの頌詩、コールリジの一、二編、シェリの、これはもつと多くて数編だが、それらは、とにかく前人未到の広大な精神の新領域を発見したものだといつてよい。それに比べると、クラブのごときは、もはや死肉に近い老いぼれだった。しかも彼は、がんとしてあくまで押韻対連の教訓的物語詩を書きつづけたのである。ぼく自身もまた、多少は若い世代の書くものを、漫然とのぞいてみたことはある。なるほど彼らの中には、すでにキーツ以上の情熱詩人、シェリ以上の靈妙な詩人が現われていて、後世長く愛唱にたえるような佳品すら、幾編か発表しているのかもしれない。そこまではわからない。たしかにぼくは、彼らの洗練さに驚嘆し——彼らは、いまの若さをもって、すでにあまりにも

完成しており、いささか有望などというのがおかしいくらいである——そのみごとにスタイルにも瞠目する。だが、彼らの広弁博辞にもかかわらず（事実彼らの語彙の豊富さは、なにか彼らは、掃りかごの中からしてすでに、ロジェイの『語彙宝鑑』〔有名な英作〕〔文語彙辭典〕をひねくりまわしていたのでないか、ということを疑わせるほどだ）、ぼくには結局おしのことばにすぎぬ。ぼくに言わせれば、彼らは、あまりにも物を知りすぎ、あまりにも露骨に感じすぎる。いきなり背中をぼんとたたいてくる心安立て、さてはこらえ性もなくぼくの胸に身を投げかけてくるような感動、そうしたもののが、ぼくはたまらないのだ。彼らの情熱も、ぼくにはなにか貧血症めいて見え、その夢もまたいささかたいくつに思える。要するに、好きでないのだ。いわばぼくは、婚期過ぎの女。相変わらず、押韻対連の教訓的物語詩を書きつづけるつもりだが、その目的は、一にぼく自身の楽しみのために書くだけのこと、かりにもほかに色気など出そうものなら、それこそぼかの骨頂というものであらう。

三

だが、こんなことは、すべて余談である。

処女作を書いたころのぼくは、まだずいぶんと若かつ